

平成 30 年 6 月 5 日現在

機関番号：32669

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2017

課題番号：25370561

研究課題名(和文) 叙述的所有表現とその獲得に関する研究

研究課題名(英文) The Acquisition of Possessive Sentences in English and Japanese

研究代表者

松藤 薫子 (MATSUFUJI, Shigeko)

日本獣医生命科学大学・応用生命科学部・教授

研究者番号：90334557

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、主に英語と日本語の所有文に焦点を当て、子どもの自然発話資料と発話の誘出調査の分析結果に基づき、所有文の獲得過程にみられる特徴を明らかにした。意味の獲得に関する仮説として英語児の獲得過程には、have所有文は近接関係から典型的な所有関係への意味の拡張がある、日本語児の獲得過程には、「ある」所有文では全体と一部の関係から所有者と所有物の所有関係への意味の拡張、「持っている」文では、携帯から所有への意味の漂白化がある、と提案した。日本語の獲得過程には所有の概念獲得、「子どもが形と意味1対1の結びつきを好む」という言語獲得原理、普遍文法の動的な内部構成が関与していることを主張した。

研究成果の概要(英文)：This study examined the developmental course of acquiring possessive sentences in English and Japanese based on naturalistic data and cross-sectional experimental data. We have proposed the following hypotheses concerning the meaning of possession: in the course of English language development, the meaning of the “have” possessive sentence extends from the relation of the possessor's proximity to that of typical possession; in the case of Japanese, the meaning of an aru “be” possessive sentence extends the relation of the whole and a part to that of the possessor and the possessee. The meaning of a motteru “have” possessive sentence expresses first carrying and then possessing, whose meaning is derived from the former meaning. We have argued that the acquisition of concept possession, a one-to-one mapping of form and meaning and dynamic or developmental principles sensitive to the present grammar can underlie the acquisition of possessive sentences in Japanese.

研究分野：言語心理学 第一言語獲得研究 英語学 言語学

キーワード：第一言語獲得 叙述的所有表現 所有文 英語 日本語

1. 研究開始当初の背景

所有という概念は通文化的に普遍的で、知られている言語全てにおいてその概念をなんらかの形で表現しようと考えられている (Langacker 1994, Heine 1977, Stassen 2009)。

形式的には、所有構文は連体表現と叙述表現に大別される。連体表現に 'John's car' 「ジョンの車」、叙述表現に 'John has a car' 「ジョンには車がある」「ジョンは車を持っている」などがある。

所有構文が表す意味は広範囲にわたる。例えば、所有者を A, 所有物を B にすると、A が B を手に持つ、A が B を所有している、A が B を家族や親族として持つなどである。形式的意味的に複雑な所有表現に関する類型論的研究はこれまでなされてきたが (Creissels 1979, Seiler 1983, Chappell & McGregor 1996, Heine 1997, Baron et al. 2001)、形式や意味に関して研究対象の領域を絞って大きな成果をもたらしたのが Stassen (2009) である。John has a car に見られるような、話題である所有者人間が、修飾語のない不定の譲渡可能な所有物を永続的に支配するという意味を表す叙述的表現を対象とし、420 もの言語を形態統語論的に分析した。その結果、言語間変異として 4 つの類型 (LOC: the locative possessive, WITH: the 'with' possessive, TOP: the topic possessive, HAVE: the 'have' possessive) の存在を確認した。その変異を説明するのに、2 つの異なったパラメータ (the balancing/deranking parameter, anterior/split parameter) を提案した。

Stassen (2009) の研究成果を生成文法理論の枠組みで援用した研究はまだなされていないようである。生成文法理論では、自然言語の類似性と多様性の両方は、「普遍文法」と普遍文法の中に含まれる、経験によって設定する必要のある「パラメータ」により捉えられると考える (Chomsky 1981)。パラメータの理論は、言語の多様性として表れる可能な言語のタイプとタイプの相対的頻度を説明し、言語獲得が可能な理由も説明する。パラメータの増発のみだと言語獲得を困難にする。しかし、パラメータ間の相互作用や階層が確認されている。例えば、Baker (2001) は、パラメータを階層的に構築し、パラメータの階層は子どもが言語獲得の途中で用いる論理的な流れ図となることを示した。さらにパラメータの階層の裾野のパラメータは、特定の単語クラスや小さな閉じたクラスに言及するパラメータとなるため、語彙的な問題と区別がつかなくなることを指摘している。

言語獲得の観点からパラメータを検討する研究は国内外で展開されている。英語の空主語現象とパラメータ (Hyams 1986)、英語の前置詞残留現象とパラメータ (Sugisaki and Synder 2002)、フランス語の名詞落下とパラ

メータ (Synder, Senghas and Inman 2001) 日本語の語順/関係詞/項削除とパラメータ (Sugisaki 2005, Murasugi 1991, Nakayama 1996) などが検討され、言語獲得からパラメータの存在に対して証拠を与えている。さらに、パラメータに言語獲得過程の早い時期に設定されるパラメータと遅い時期に設定されるパラメータがあることが確認され、その違いが生じる理由が提案されている (Guasti 2003, Rizzi 2004, Baker 2001)。

しかしながら、1) 生成文法理論に基づいた所有叙述表現のパラメータの内容と定式化の検討と 2) 所有叙述表現の言語獲得からのパラメータ理論の検討はまだなされていないようである。所有叙述表現において、日本語 (主要 LOC, 副次 TOP, 3 次 HAVE) は英語 (HAVE タイプ) より異なった複雑な特徴があるため、興味深い事実や証拠が提供できる。本研究は 1) 2) を研究課題として取り組み、言語の類似性と多様性、言語獲得可能性をすべて説明できるような理論発展に貢献する研究と位置づける。

2. 研究の目的

所有表現の類型論研究が進展し、普遍特性と変異特性が明らかになってきた。その知見に基づき、松藤 (2012) は英語と日本語の叙述的所有表現の、所有構文に使われている動詞、所有構文と存在構文の交替、所有物の語彙の意味に焦点をあて共通点と相違点を明らかにした。本研究は、主に英語と日本語の所有表現の獲得過程を明らかにし、大人の言語知識とその獲得過程を両方説明しうる言語理論を検討し、叙述的所有表現の獲得のメカニズムを解明することを目的とする。具体的な研究項目は、大人の言語知識でどの部分が普遍的で、どの部分が言語経験を通して獲得されるのかを明らかにする。子どもは所有の概念のどの要素をどのような形で表現するのかを考察する。言語獲得の論理的・発達的問題の両者に答えを与え得る言語獲得理論を検討する。

3. 研究の方法

(1) 平成 25 年度では、叙述的所有表現に関して普遍的部分と獲得される部分の解明を試みる。

Stassen (2009) は、形態統語論的分析による類型論的枠組みを使って、420 もの言語の叙述的所有表現を比較分析した。話題である所有者人間が、修飾語のない不定の譲渡可能な所有物を永続的に支配するという肯定的な意味を表す表現 (John has a car, 「ジョンには車がある」など) を研究対象にしている。この表現の言語間変異として 4 つの類型 (場所構文、with 構文、話題構文、have 構文) があること、普遍的特性として have 構文が譲渡可能な所有を表すなら、一時的所有も表すことなどを明らかにした。

上記の成果を踏まえ、松藤 (2012) は、英語

と日本語の叙述的所有表現に関して共通点と相違点を明らかにした。共通点としては、(1a)文中に生起する所有者表現と所有物表現の順序は、前者が先、後者が後である。(1b)所有物の語彙の意味が文全体の意味を決める点である。相違点は、(2a)類型論上、永続的譲渡可能所有の意味を、英語は HAVE 構文(have タイプを用いた他動詞構文)で、日本語は LOC 構文(場所を表す自動詞構文)、TOP 構文(話題を表す自動詞構文)で表す。(2b)その構文で使われる動詞に関して、主に、英語では have、日本語では、「いる/ある」が使われる。LOC/TOP 構文では使われないが、他動詞「持っている」も使われる。(2c)所有文と存在文の交替に関して、i)所有文に場所表現を加えると存在を表す、ii)存在文に所有表現を加えると所有を表すという方法がある。日本語は i)ii)両方可能、英語は i)は可能で、ii)は使えない。

平成 25 年度は、上記の共通点や相違点に内在する諸要因を調べ、どの部分が普遍的で、どの部分が言語経験を通して獲得されるのかを明らかにする。方法としては、例えば、以下のように関わる要因を挙げて、共通点や相違点をどのようにとらえるのが妥当か、その可能性を詳細に提示する。

(1a)に関わる要因：語順の決め方(情報構造、語順パラメータなど)

(1b)に関わる要因：文の意味の計算方法、語彙の意味表示

(2a)に関わる要因：言語間変異(パラメータ、獲得過程を捉える一般法則など)

(2b)に関わる要因：動詞とその意味表示、

(2c)に関わる要因：所有文と存在文のそれぞれの意味表示

(2)平成 26 年度では、2 つの課題に取り組む。1 つは、平成 25 年度内で明らかにできなかった課題について研究する。2 つめは、子どもの叙述的所有表現の獲得過程の解明への基礎研究を行う。

平成 25 年度の研究成果の確認と未解決課題の研究

所有表現の類型論研究が進展し、普遍特性と変異特性が明らかになってきた。その知見に基づき、申請者は最近、英語と日本語の叙述的所有表現の共通点と相違点を明らかにした。平成 25 年度は、共通点や相違点に内在する諸要因を調べ、どの部分が普遍的で、どの部分が言語経験を通して獲得されるのかを明らかにする。方法としては、共通点・相違点に内在していると考えられる諸要因を挙げて、共通点や相違点をどのようにとらえるのが妥当か、その可能性を詳細に提示する。具体的には、例えば、共通点の 1 つである所有者と所有物の表現順序に関わる要因として、語順の決め方を捉える情報構造、語順パラメータなどを検討する。平成 26 年度では、平成 25 年度で行った研究成果を整理し、未解決な課題を明らかにした上で、その

課題について引き続き研究を行う。

子どもの叙述的所有表現の獲得過程の解明への基礎研究

Sonja et al.(2009)が指摘しているように、叙述的所有表現の獲得過程の全体像は明らかにされていない。これまで、ドイツ語児は、所有者、所有物の順で所有文を発話するや定性の制限を早期に獲得する(Sonja et al 2009)、英語児の早期の発話 have it は物の要求を表している(Tomasello1992)、日本語児の早期の発話「あった」は存在や出現を表している(今西 1993)などが調べられている。研究期間内では、主に英語児と日本語児の自然発話資料の分析や発話産出や理解確認の調査結果に基づき、英語児と日本語児の叙述的所有表現の獲得過程を明らかにすることを目標にする。平成 26 年度の研究項目は、主に英語と日本語に焦点をあてて、子どもは所有の概念のどの要素をどのような形で表現するのかを明らかにする。方法としては、まず、子どもの自然発話資料データベース(例：CHILDES、野地、国立国語研究所など)を調べる。

(3)平成 27 年度では、まず平成 26 年度の研究を進展させる。次に、子どもの叙述的所有表現の獲得過程の解明に向けて予備的調査を行う。

平成 26 年度の研究成果の整理と考察

平成 26 年度では、子どもの叙述的所有表現の獲得過程の解明への基礎研究を行い、主に英語と日本語に焦点をあてて、子どもは所有の概念のどの要素をどのような形で表現するのかを明らかにする。方法としては、子どもの自然発話資料データベース(例：CHILDES、野地、国立国語研究所など)を調べる。平成 27 年度では、平成 26 年度に行った研究成果を整理し、叙述的所有表現の獲得過程にみられる以下の点を考察する。

a. 所有文 X have Y「XにYがある」「XはYがある」のうち、子どもはどのような形でどのような意味を表すか。日本語の所有文のXに関して場所と所有を区別して使用するの

か。
b. 所有者 X と所有物 Y の順序に関して、英語では X have Y, Y belong to X, Y is X 日本語では「XにYがある」「XはYを持っている」「YがXにある」「YはXのだ」に注目して調べる。

c. Stassen(2009)のパラメータの予測を確かめる。X have Y「XにYがある」「XはYがある」が獲得されていれば、deranking/balancing パラメータ(節 2 つにそれぞれ使われている動詞に関して一方の動詞の形がもう一方の動詞の形と同じか異なっているか)と split/share パラメータ(場所を表す構文と部類・職業を表す名詞的構文で使われる自動詞が同じか異なっているか)の固定が獲得される言語に従ってなされているかどうかを調べる。

d. 意味の漂白化が獲得過程でみられるのか。具体的な所有関係がまず表現され、次に抽象的な所有関係が表されるようになるのか。

e. have 構文の普遍的特性が獲得過程でみられるか。英語では、譲渡可能な所有と一時的な所有はいつ理解され、使われるようになるのか。

f. 定性の制限はドイツ語児と同様に、英語児・日本語児も早期に獲得されるのか。

子どもの叙述的所有表現の獲得過程の解明に向けての予備的調査

の課題の研究成果を整理し、未解決な課題を明らかにする。予備的調査の目的、方法を詳細に検討する。予備的調査を行う。調査結果を吟味し、本調査にむけて検討を重ねる。

(4) 平成28年度では、本調査を実施する。横断的・実験的な研究方法を採用して、叙述的所有表現の獲得を調査し、数量的・質的分析を行う。

平成25年度から27年度では、叙述的所有表現に関して、大人の言語知識でどの部分が普遍的で、どの部分が言語経験を通して獲得されるのかを明らかにする。主に英語児と日本語児の自然発話資料と予備調査資料の分析結果に基づき、英語児と日本語児の叙述的所有表現の獲得過程の解明を試みる。平成28年度では、これまでの研究成果から不十分な点を明らかにし、予備的調査方法を改善させて、横断的本調査を行う。

調査・実験とその結果への対策については、社会的コンセンサスや個人情報保護の観点から、発話資料の収集のための調査・実験・結果の取り扱い等には細心の注意を払う。具体的方策として、調査・実験は、以下のa~dに関して書面と面接等で幼稚園・保育園・学童保育室・被験児の保護者に了承を得た後に実施する。

a. 被験児の氏名は公表せず、child 1(3;0)、K男(3;5)のような匿名と年齢を記述すること

b. 被験児の発話以外の情報は一切公表しないこと

c. 発話資料は研究以外の目的には使用しないこと

d. 調査・実験の目的と方法

調査が当初計画通りに進まないときの対応については、既存の幼児自然発話資料データベースや横断的調査結果が不十分である可能性を考え、また、日本語の叙述的所有表現の獲得過程の全体像が解明されていないため、日本児一人の縦断的調査を進める。

(5) 平成29年度では、叙述的所有表現の獲得のメカニズムを解明に取り組む。

平成25年度~28年度までに叙述的所有表現に関して基礎的研究を完成させ、平成29年度では、その研究成果から得られた証拠や知見を、言語の普遍特性、変異特性、言語獲得に関する論理・発達的問題に対して説

明しうる言語理論に展開するための基礎となる研究を行う。具体的には、獲得研究から普遍文法の内部構成と言語獲得原理を検討する。

現実の言語獲得は時間軸に沿って進行するが、生成文法理論を展開しているチョムスキー(1965,1971,1981,1986,1995,2001)は、時間軸を捨象して、普遍文法と言語獲得原理を含む言語獲得装置に、言語経験の総和が一括として取り込まれると仮定し、言語獲得装置からは瞬時に大人の各個別言語の文法が出力されるという言語獲得を理想化した瞬時的言語獲得モデルを提案している。「発達」の問題を説明しうるには、普遍文法のあるものは、獲得過程のある時期まで待たないと発現しないと仮定する成熟仮説を組み込んだり、一定の経験が与えられたときにパラメータの値をどのようにして定めるかを規定する仕組みを言語獲得原理として定めたりする必要がある。一方、生成文法理論の精神に従っているが、普遍文法をチョムスキーのように静的な大人の文法だけで規定しない動的文法理論を展開する梶田(1977,1997)は、普遍文法の内部構成を非瞬時的な動的過程として規定するため、「発達」の問題に対して特別な仕組みは必要ない。獲得過程にみられる各段階の文法の諸特徴が習得可能な文法を狭く限定し、言語間変異を捉えるのにも重要な役割を果たしている。最終年度、平成29年度では、平成25年度から28年度までに叙述的所有表現に関する大人の知識の解明と子どもの叙述的所有表現の獲得過程の解明をしたことを踏まえて、普遍文法と言語獲得原理がどのようなものでなければならぬかを検討する。

4. 研究成果

(1) 平成25年度では、松藤(2012)で明らかにした英語と日本語の叙述的所有表現にみられる共通点と相違点を踏まえ、生成文法理論に基づき、叙述的所有表現のどの部分が普遍文法で規定される特徴であるのか、どの部分が言語経験を通して獲得される、個別言語に特有な特徴であるのかを考察した。その結果、以下の4点を明らかにした。

第1に、所有者を表す名詞句が先、所有物を表す名詞が後という順序がみられる。普遍文法に基本的語順を決定するパラメータがあると提案されている。子どもは早期に自分の母語の言語経験によりパラメータ値を固定し、所有者・所有物を含む文にも当てはめる。

第2に、英語、日本語などそれぞれの言語が持つ叙述的所有表現の形式に関して言語間変異がみられる。その変異を説明するために、少なくとも2つのアプローチがある。1つは、普遍文法にその変異を捉える2種類のパラメータがある。その1つが、出来事2つを2つの節で表す文に関わるものであるため、子どもは比較的遅い時期に言語経験に基づ

きパラメータ値を固定する。もう1つのアプローチは、普遍文法に、ある獲得段階から次の獲得段階の文法への移行をとらえる一般法則があり、その最終結果として生じる文法が言語間変異と考えるものである。

第3に、所有を表す動詞の項構造は、子どもが言語資料に接しながら、個々の動詞の語彙情報を獲得し、生得的な連結規則を用いて、項と文の統語構造を結びつける。所有文の意味は、生得的な言語獲得原理・意味の合成の原則と文化・経験を通して獲得する。

第4に、叙述的所有表現に表れる名詞は格や後置詞を取る。普遍文法に格認可システムがあると仮定されている。格を具現しない英語を獲得する子どもとは異なり、日本語児は、格標識を表す語や後置詞に属する語を学習しなければならない。

以上から、状態を表す叙述的所有表現の方が一般的な動作を表す叙述表現より獲得が遅い、日本語の叙述的所有表現の方が英語の叙述的所有表現より獲得が遅いと推測される。言語獲得から得られる資料が、ある分析案の妥当性に対して証拠になる可能性があり、また、普遍文法の内部構造に基本・派生の概念を組み入れた方が妥当かどうかを検証する資料になる。上述の推測や可能性を検討する必要がある。

(2)平成26年度では、日本語児の自然発話資料に基づき、叙述的所有表現の獲得過程を考察した。その結果、以下の3点が明らかになった。1つは、所有文も存在文も大人と同じ語順で使われた。所有文では所有者、所有物の語順のみがみられた。存在文では、場所、存在物の順、存在物、場所の順の両方の語順がみられた。2つめは、「ある」所有文では、所有者の意味は、人間で使われることが多いが、早期から動植物・人工物でも使われていた。所有者の名詞句に付加される「には/に/は」は、使われない場合が多かった。使用頻度が少ないが「は」「に」「も」「が」が使われた。所有物の名詞句には定名詞句や関係節がみられず、定性の制限に従っていた。一方、「ある」存在文では、場所を表す位置には、場所表現が9割以上であった。場所を表す名詞句には「に」が8割以上使われていた。存在物の名詞句には定名詞句や関係節がみられ、定性の制限はみられなかった。3つめは、所有という意味を表す構文「X{には/に/は}Yがある」「X{は/が}Yを持っている」において、これらの構文が2歳台から使われ始めた。この2つの構文が表す意味の差異は大人の場合は、「ある」「持っている」を含む所有文と「持っている」の携帯文があるが、子どもの場合は、全体と一部の関係をとらえる「ある」状態文と「持っている」の携帯文であった。大人の言語知識には「ある」「持っている」の所有文があるため、日本語児の叙述的所有表現の獲得に関する仮説として、日本語児の獲得過程には、「ある」所

有文に関しては全体と一部の関係から所有者と所有物の所有関係への意味の拡張、「持っている」文に関しては、携帯から所有への意味の漂白化がある、を提案する。

今後の課題は、1つは、上記の仮説を実証的研究で検証すること、2つめは、叙述的所有表現の獲得の背後にある法則性を解明するため、英語の叙述的所有表現 have 文の獲得過程を調べ、日本語のものと比較する必要がある。

(3)平成27年度では、英語児の自然発話資料に基づき、叙述的所有表現の獲得過程を考察することを目標とした。have を含む文に焦点をあて、大人の言語知識において have の主語と目的語がどのような意味関係を表すかを整理し、大人の言語知識を子どもがどのように獲得するのかを考察した。その結果、子どもの言語獲得過程にみられる特徴として以下のことを明らかにした。動作動詞 have を含む文は2歳から使われ始める。状態動詞 have を含む文は2歳から使われ始める。人間が所有者、物が所有物であるかどうかは明らかではないが、人と物の(短期の)「近接関係」が高頻度で表された(これは大人ではみられない)。この頻度は、年齢が上がるに従って下がるが、5,6歳になってもその使用が無くなることはない。使用頻度は少ないが「携帯関係」「全体と一部の関係」「家族友人関係」は2歳、3歳から表される。「典型的所有関係」は3歳以降に少しずつ表されるようになる。「典型的所有関係」を表すには、5つの条件をすべて同時に満たさなければならない。have を含む文と特に所有物の価値、所有者の独占権、所有関係の長さを結びつけることに困難を伴うように思われる。英語児の叙述的所有表現の獲得に関する仮説として、英語児の獲得過程には、have 所有文に関しては近接関係から典型的所有関係への意味の拡張がある、を提案する。

(4)平成28年度では、横断的・実験的な研究方法を採用して、日本語の叙述的所有表現(以下、所有文)の自然さに関する調査とそれに基づく子どもの所有文の獲得に関する調査をし、数量的・質的分析を行うことを目的とした。平成28年度では、これまでの研究成果から不十分な点を明らかにし、横断的調査を2種類行った。

1つは日本語の所有文の自然さに関する調査である。日本語の代表的な所有文の1つに、[所有者「人」+所有物「具体的物体」+動詞「ある」]という形式が使われ、文法的ではあるが、所有物の意味的特徴や所有文を使う際の語用論的特徴にはあまり関心が払われていない単文が、研究書や論文などの例文として用いられてきた。自然な所有文にするために、統語的・意味的・語用論的特徴を考慮し、これまでの研究で不明であった点を160人の大学生のアンケート調査に基づき

明らかにした。所有文の基本的語順は、「所有者+所有物+所有動詞」の順序であるが、その語順は固定しておらず、かき混ぜ操作により動詞を文末におけば語順は比較的自由であることを示した。具体的物体を所有する文では、所有物は価値のある物であるほうが自然である。動詞「ある」が使われる単文、動詞「ある」を含む文とその所有文を発話する理由を述べる文、動詞「持っている」が使われる文の順で自然であることを明らかにした。

上記とこれまでの知見に基づき、子どもの所有文の誘出調査を行った。成果は、29年度に報告した。

(5)平成29年度では、叙述的所有表現(以下、所有文)の獲得メカニズムの解明を試みた。前年度に行った子どもの誘出調査の結果を分析し、以下の4点を明らかにした。1つは、典型的所有を表す「ある」文の所有者につく助詞「には」は5歳9ヶ月ごろに使うことができる。2つめは、人が物を手に持ったり身に着けたりしていないが、物を所有している場面で、典型的所有を表す「持っている」文を5歳1ヶ月ごろに発話することができる。3つめは、「ある」文と「持っている」文が両方使える場面では、「持っている」文のほうが4、5歳の子どもは使いやすい。4つめは「所有者には所有物がある」が使われた文脈では、所有者につく格助詞は「には」より「は」や格助詞の省略のほうが、4、5歳の子どもは使いやすいということが分かった。

さらに、上記の子どもの発話の誘出調査と松藤(2015)の自然発話資料調査の両方の分析結果に基づき、日本語の所有文の獲得過程の特徴を明らかにした。その獲得過程には(i)所有の概念獲得、(ii)「子どもは形と意味の結びつきにおいて、1対1の結びつきを好む」(Slobin 1973, 1985)という言語獲得原理、(iii)獲得過程の中間段階の文法の特徴が大人の文法の特徴に影響を与えるという普遍文法の動的な内部構成(Kajita 1977, 1997)が関与していることを議論した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件)

松藤 薫子「生成文法理論に基づく叙述的所有表現の一考察：普遍的特性で規定されている部分と経験により獲得される部分」日本獣医生命科学大学研究報告 63, 58-66, 2014年12月, 査読有

松藤 薫子「日本語の叙述的所有表現の獲得に関する予備的考察」日本獣医生命科学大学研究報告 64, 34-43, 2015年12月, 査読有

松藤 薫子「英語の叙述的所有表現の獲得に関する予備的考察：動詞 have 含む発話文の分析から」日本獣医生命科学大学研究報告 65, 25-33, 2016年12月, 査読有

松藤 薫子「日本語の所有文の自然さに関する一考察」日本獣医生命科学大学研究報告 66, 14-20, 2017年12月, 査読有

〔学会発表〕(計 1 件)

松藤 薫子「日本語を母語とする子どもの所有文の習得について」日本言語学会第155回大会 予稿集 145-150, 2017年11月

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松藤 薫子 (MATSUFUJI, Shigeko)
日本獣医生命科学大学・応用生命科学部・教授
研究者番号：90334557